

愛媛大学教育学部

第125号

同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番
愛媛大学教育学部総務係室内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-8304

E-mail : dosokai@ed.ehime-u.ac.jp



賀 春
元 旦

愛媛大学教育学部同窓会役員一同

ご 挨拶



佐野 栄

愛媛大学
教育学部長

新年明けましておめでとうございます。同窓会の皆様におかれましては、日頃から愛媛大学教育学部に多大なるご支援をいただき、心より御礼申し上げます。昨年の本誌紙面におきまして、私は、平成二十八年度に教育学部は組織を改編して新しい体制で再出発した旨の挨拶をさせて頂いていただき、た。学部の教員養成への特化、大学院教育学研究科に教育実践高度化専攻（教職大学院）の新設のご報告をいたしました。特に教職大学院は、教員養成の高度化を目的として新たに発足した組織ですので、うまく運営できるかどうか心配されたところですが、おかげさ

まで、愛媛大学の教職大学院は、他の都道府県に設置されている教職大学院と比べて遜色のない、むしろ国内トップレベルの教育を施している大学院として注目を集める存在になりつつあります。これは、ひとえに、愛媛県教育委員会、松山市教育委員会を始め、県内の多くの教育機関の皆様が多なるご支援とご協力の賜であると感謝しています。

さて、昨夏、「国立大の教員養成縮小を 文科省『公立小中の需要半減へ』や『教育学部 再編・統合か』といった見出しの記事が新聞紙上に掲載されたことを記憶されている方も多いかと思えます。これは、文科科学省に置かれた「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議（以後、有識者会議）」が、昨年八月二十九日に提出した報告書の内容を受けてのマスコミの反応でした。今後、全国の国立教員養成学部・大学は、この報告書の内容に関する対応に追われることとなります。昨年度、改革を行っ

たばかりの愛媛大学教育学部・教育学研究科は、再度、組織の見直しを迫られることになりそうです。文科科学省が、有識者会議において、上記のような方向性を打ち出したのは、今後、少子化による教員需要の減少が予測されているためです。愛媛県においては、今後十数年間は現状と同等の採用数が見込まれていますので、全国的な減少傾向とは異なった教員の年齢構成であるといえます。ところで、愛媛大学教育学部には、第三期中期目標期間（平成二十八年～三十三年の六年間）中に、いくつかの数値目標が設定されていますが、中でも、「愛媛県小学校教員新規採用者占有率を四十パーセント以上にする」、「教育学部卒業生のうち教員就職率を八十パーセント以上にする」という二つの数値目標が重要となります。前者の目標値については、教育学部における教員養成の規模と教員採用に関する需要のバランスから、四十パーセントの数値目標を達成することは非常に厳しいことが予想されています。一方、後者については、教育学部に入学者が教師になりたいという強い意欲を持っていくかが重要になりますので、そういった高い意欲を持つた生徒を教育学部に受験させるよう、地域の高等学校に働きかけを推進しているところです。平成三十年度愛媛県の教員採用試験

では、小学校教員候補者として二百十五名が合格しています。この全合格者数に対する教育学部卒業者における合格者占有率は、まだ目標には及ばない数字ですが、今後目標に近づけていけるよう対策を進めているところです。

同窓会の皆様、少子化に伴う教員需要の縮減により、教育学部を取り巻く状況は決して明るいとはいえません。しかしながら、より良い教員の育成は、地域の教育力を高めることであり、将来の、地域を担う人材の育成につながります。人口減少に伴う地方の衰退を防ぐためには、その地域の教育力の高さ、福祉・医療の充実、産業の発展・文化的な営みの確保等が、バランス良く充実していくことが大切であると考えています。とりわけ、次世代の地域を担う人材育成、教育が要であると信じています。教員養成は、愛媛大学がその機能強化を推進する戦略の一つに掲げている「地域の持続的発展を支える人材育成の推進」の中核を担う位置付けであるといっても過言ではありません。今後、地域の皆様と更なる連携体制を強め、確かな教育力を備え、地域と協力して子供たちを育てることのできる教員の養成に努めていきたいと考えています。同窓会の皆様には、今以上のご支援・ご協力を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

目 次

表紙

「東京待宵」…………… 渡邊 裕公
題字 元愛大教育学部教授 菊川 國夫
「ご挨拶」…………… (1) 愛媛大学教育学部長 佐野 栄
心 響…………… (2) 「今、できることは、今しか、できない」
愛媛大学教育学部教授 立入 哉
学部の今…………… (3) 社会科学教育研究室紹介…………… (3) 「駕原 進教授」
森の国松野町林間学校…………… (5) 数学教育専修四回生 琴井谷朋代
社会科学教育専修四回生 山川 義弘
学部最近のニュース…………… (7) ・《第一回科学イノベーション挑戦講座》を実施しました
・四国教職大学院連携推進に係る共同実施型授業（試行）に挑戦しました
・小学校英語教科化に向けた専門性向上の認定講習を開始します
職場だより…………… (9) 「出会いと経験から得るもの」
西条市・東予西中教諭 …… 曾我部有衣子
「学んだこと」 …… 亀岡 美咲
久万高原町・畑野川小教諭 …… 亀岡 美咲
「出会いに感謝」 …… 河野 寛志
大洲市・大洲小教諭…………… 河野 寛志
「私と本」 …… 石原 妙子
八幡浜市・真穴小教諭…………… 石原 妙子

今、できることは、 今しか、できない

愛媛大学教育学部教授

立入 哉

(昭六〇卒)

教育学部の教員として、教育学部国際交流委員会の委員長を務めている。まずは、絶え間なく、同窓会から教育学部の国際交流に対し、助成をいただけていることを改めて御礼を申し上げたい。

一 私と国際交流との原点

愛媛大学教育学部聾学校教員養成課程を卒業後、徳島県立聾学校に就職した。ある時、数名の外国人が視察に訪れた。英語が全く話せなかつた当時、遠方からの来客に自己紹介すらできなかった。

その後、イスラエルで開発された世界初の補聴器があることを知り、その補聴器をなんとか日本で利用できないかと果敢にも本社にファックスを送り、社長自らからお返事をいただくことができた。これがきっかけで、日本への輸入に成功。さらに、その補聴器を紹介するゲストをアメリカから招待して国内でセミナーを開催するというところまで発展できた。

二 スリランカでの出会い

現場の教員としての限界を感じ、教員養成の仕事をしたくない

い、教員生活を七年間で終え、筑波大学の修士、博士課程に進学した。その頃、同じ院生がJICAの聴覚障害児教育の専門家派遣でスリランカに赴くことになった。その院生の派遣期間中に何度か、スリランカに旅行し、現地の聾学校を参観する機会が得られた。ここでの経験がもとで、スリランカ、ベトナム、バン格拉デシユ、パレスチナといった国々の聴覚障害児教育支援に関与することになった。



心響

三 アメリカへの留学

平成十六年、愛媛大学が国立大学から国立大学法人に変わり、それまでの文部科学省の国費研究者派遣の制度がなくなった。一度は、長期に海外で学んでみたいと思っていただけに、愕然としたが、直後に愛媛大学外国派遣研究員制度ができ、同年十一月に応募、翌平成十七年三月から十ヶ月、コロラド大学で学ぶことができた。

せつかくのアメリカ長期滞在と
思い、小二と五歳の子を含む家族でコロラド州ボルダーで生活した。先方の博士課程の院生と共に多くの学びを得ることができた。

加えて、子どもを通じて、アメリカの教育システムや授業の進行、保護者の学校への関与の在り方なども学ぶこともできた。

運動会では「ヨイ、ドン」は一切なく、子どもがそれぞれ登校し、登校したときがスタートで、校内のあちこちに設けられた様々なスポーツを体験できるブースを巡り、選んだ二十のブースを体験したら終わり。

馬拉ソンデーでは、まちまちにスタートすると、馬拉ソンコースの各所で街の人が待っていて、ホースやバケツで走っている子どもに水を掛ける。ビチョビチョになって学校にあるゴールに戻れば、その時点で解散し、家に帰っていく。

四 国際交流を通して

私の英語はSurvival Englishである。つまり、「ようやく生活できるレベル」であって、学術研究に耐えられるものではない。

しかし、それを通して、補聴器の輸入ができ、専門の領域のことであれば、Asian Englishで各国の聴覚障害児教育のことがわかり、NGOの立ち上げなど支援に携わることができた。

アメリカの生活の中で、自分の英語がまさにSurvivalであること

とを痛感したが、他の国からの留学生と共に学ぶ中で、「それなりに通じる」自信も得ることができた。

五 今、できることは、今しか、できない

大学で国際交流関係の窓口教員として、留学を呼びかける。そして、何名かの学生が「留学をしたい」と申し出てくるが、半数は諦めてしまう。その過程の中で学生たちに「今、できることは、今しか、できない」と声を掛けてきた。「もう英語ができるなら、加えて留学する必要なんてない、英語に自信がないからこそ留学するんだ」とも声を掛けてきた。

日常生活や仕事に追われていると、「忙しくて、できない」と思っ、最初から諦めてやめてしまうことも多い。

しかし、その中で、「ちよつと面白そう」とか「少しだけ時間がありそうだ」という時があれば、それが「できる時」であり、その時を逃したら、新たな世界への窓はもう開かない。

「できる時間」「ちよつとした興味」をチャンスに変え、自分の価値観を変える機会にできることが、国際交流の醍醐味であると思う。

(〒790-0833 松山市祝谷 五一二二五)

「父の言葉」

鬼北町・日吉小教諭……伊藤 大志

「教育で社会を変える」

新居浜市・新居浜商業高教諭 …… 副島 丈義

先輩を偲ぶ……

林傳次先生遺稿集「把翠」を繙く(十六) 読書の思い出 …… 15

恩師からの便り……

愛媛大学教育学部に着任して …… 16

元愛媛大学教育学部教授 …… 影山 昇

文芸……

川柳「百葉の長」 …… 西山 俊雄

俳句「角切」 …… 久保田由布

短歌「戦時下、終戦時を詠む」 …… 水墨画「水墨画とともに」和田 桂子

会員の声……

「念願が通って」……吉原 宏文

「戦後二十年代の松山市内雑感あれこれ」……小野植元幸

「青春の歌声溢れる『さんし会』を開きました」……河合 淳

表紙作品「東京待宵」について …… 棟梁・坂本又八郎の情熱と工夫 …… 学内トピックス …… サッカー部活動 ……

叙勲・受賞 …… 15

寄贈図書・会報送料寄付者名 …… 26

敬 申 …… 26

原稿募集 …… 14

職員会館の利用案内 …… 16

放送大学入学生募集 …… 16

愛媛大学ミュージアムから …… 20

第八回愛媛大学ホームカミング …… 27

デイを開催しました ……

学部 の 今



研 究 室 訪 問

社 会 科 教 育 研 究 室 紹 介 鴛 原 進 教 授



同窓会の皆様、お変わりございませんでしょうか。皆様には、教育学部の取り組みにご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。社会科学教育講座におります鴛原進（おしはらすすむ）でございます。

ちよつと昔話を

私が、愛媛大学教育学部に赴任いたしましたのは、二〇〇一（平成十三）年でした。まさに、



ゼミ生の木下花菜さんと
(2017年3月)

当時は、川岡勉先生（日本史）、矢澤知行先生（東洋史）、中谷功治先生（西洋史）、金藤泰伸先生（人文地理学）、川瀬久美子先生（自然地理学）、諸根貞夫先生（法

学）、岡村茂先生（政治学）、松野尾裕先生（経済学）、中西典子先生（社会学）、壽卓三先生（倫理学）、加藤寿朗先生（社会科学教育）の十一人の先生方が社会科学教室にはいらっしやいました。そうそうたる先生方を前に、緊張した日々を送っていたことを思い出しています。ですが、持ち前のずうずうしさから、その感覚もすぐなくなりました。

二十一世紀の始まりとともに大学教員生活を開始した。金藤泰伸部長（当時）から、恭しく採用の辞令を受け取ったことを思い出しました。その時、当方を含め採用者は五人でした。今は、平松義樹先生と当方の二人がこの教育学部でお世話になっております。

さらに昔話を

近藤重明先生（哲学）がご定年でご退職なさり、前田忠弘先生（法学）がご転出された次の年度に社会科学教室の一員に入れていただきました。

私は、自分の来歴を「ロシア帝国の南下政策」のように説明しています。生まれてから高校卒業の十八年間は島根県西部で過ごしました。その後、大学、大学院、就職（小学校講師と公立中学校教諭）の十年間を広島県で過ごしました。私的な事情で徳島県の中学校の採用試験を受け直し、三年は



3号館改修後の研究室にて学生さんとともに
(2013年12月)

徳島県の公立中学校教諭をしておりました。二〇〇〇年六月には徳島県阿南市に自宅も建て（夫婦とも公務員でしたら住宅金融公庫（当時）も喜んでローンを組みましてくれました。）、「徳島県の教員として定年まで勤めるのだ」と思っていた時、ありがたいことに、教育学部への採用が決まりました。（松山では、手当の出ない単身赴任を続けております。）愛媛県民、松山市民歴は、愛媛大学に勤めている時間と同じとなります。

徳島から、少し北に戻りました。北から南へ生活の拠点を移してきました。ちなみに、大学時代の第二外国語は「ロシア語」を履修しました。偶然にも……。

堅い話になります

二〇一〇頃（だったと思います）が、教育学部の教員の研究室の看板がかかりました。かつては、各教員の専門を記した「〇〇研究

室」でした。例えば、私の研究室は「社会科学教育研究室」でした。それが、すべて「教員研究室」という看板にかかりました。統一した表記になったのです。また、今は、各部屋には部屋番号が付されています。

統一表記は、部外者には便利なサインになります。学生さんを含めたほとんどの来室者には、効率よく行きたい部屋にたどり着けることが重要でしょう。それを表記上示したのが、「教員研究室」であり、部屋番号です。統一表記が望ましいことはよく分かっております。

このことは、先生、教師、教員

は、没個性的でよいのだろうかと言うことを考える契機にしてくれました。たどり着くことの効率性も大切だけれども、来室して何をやっている人と何を話すのかも大切なのではないかと思つたわけです。効率性と個性をどのように両立できるのかを考えた場合、自らの専門をさまざまなところで発信し続ける必要が、今の教師には出てきているわけですね。その責任を各人が持つと言うことだと思いました。特に、愚研の看板であった「社会科教育研究室」の名称を、「社会科教育学研究室」ではないので、当方は大変誇りに思っておりまして、今もその名称に愛着を感じております。ですので、「社会科教育研究室」の研究室看板をドアの内側につけております。その誇りを大切にしながら、それに見合う教育と研究を進めていかなければ……と思つているところです。堅い話になりました。すみません。実は、頑固なのです。

自分がしていること

私は、「アメリカ合衆国における社会科グローバル学習論」の展

開」を基軸に研究を進めている（ことになっている）。それらの成果の一部を生かして、社会科授業実践の改善、社会科教員養成・研修による授業力向上、現在における主権者育成などについて、他大学の社会科教育担当者と共同研究を進めています。また、十五年前より、在学生や卒業生などとするより、在学生や卒業生などとするやかで柔軟な「社会科教育フォーラム (Social Studies Education Forum: SSEF)」を、ゆるく組織し、研究と実践の共有や情報交換を行っています。サボることの方が多いのですが、年に一回は、在学生と卒業生に、「社会科教育フォーラム (Social Studies Education Forum: SSEF)」という通信を送りつけております。

実社会から学ぶ

ありがたいことに、お声をおかけいただき、附属学校の先生方、地域の先生方とともに、勉強させていただいております。社会科のみならず、生活科・総合的学習の研究会運営、スーパーグローバルハイスクール指定事業等での取り組みなど、多様な社会の様相や要望にも柔軟に対応している

(つもりになっています)。

プチ自慢

松山市とサクラメント市 (Sacramento) の姉妹都市交流も、サクラメント松山姉妹都市協会の副会長として微力ながらお手伝いさせていただいております。(姉妹都市協会の会長は、愛媛大 学校友会前会長の森本惇氏です。) おかげさまで、何かと理由をつけて、毎年、サクラメントに行っております。(当然自腹で行くことが多いのですが……)

昨年度の四月から九月にかけて、愛媛新聞のコラム「四季録」木曜日を担当させていただきました。自分は、狭い世界でしか通用しない用語を結構つかっていることを再認識することができました。つい、どんなところでも、唐突に、自分の専門としている分野



サクラメント市役所表敬訪問の集合写真 (2017年5月)

の話をしたくなるのが大学教員の悪いところ。その場合も、ついつい、専門的な用語や、自分の専門分野での意味合いで使われている言葉を用いて論述してしまいます。それを、編集の方に直していただく事が多かったです。不特定多数の方に理解していただくための「言語変換」の大切さとニュアンスの違いを受け入れる書き手の度量を学ぶことができました。

実証や具体の重要性を伝えたい

愚妻の恩師(札幌、仙台、広島、福岡などの地方中枢都市を研究する地理学者)が、「鳥が鷹になり、鷹が鳥になる時代」というフレーズで、事実から真実を、足を使つて、実証的に探究することの大切さを語っていらつしました。自分の恩師は、具体を大切にすることを教えてくれました。理論的抽象的思考の成果を具体で示すこと、そして、具体の中に潜む抽象を見いだすことの必要性を覚えていただきました。

また、それらを、授業のように、理解しやすいように、かつ、愉快に伝えることの大切さを痛感しているところです。

ですので、できる限り、学生さんをはじめ、何かをしようとしている人の取り組みには顔を出し、一緒に考えるようにしています。特に、学生さんには迷惑でしょうが、それが、自分の使命だと感じているのです。

同窓会の皆様におかれましても、引き続き、よろしくお願ひ申し上げます。

地域連携実習

森の国松野町林間学校

愛媛県の南予地方に位置する松野町で、町の全面協力のもと行われる「森の国 松野町林間学校」。今年で六年目になる。今年も愛媛

大学生二十名が参加をし、手厚いおもてなしを受けながら、松野中学校の生徒と小学生と交流する機会を頂いた。午前中、中学校の教員志望者十名は、松野中の三年生と数学の勉強、小学校の教員志望の学生十名は松野町立南小学校、東小学校で小学生と夏休みの宿題や川遊び、体育館でのレクリエーション等でふれあうことができた。

	午前	午後
8月7日(月)	台風のため中止	
8月8日(火)	林間学校開校式	学習指導1
8月9日(水)	学習指導2	サンドプラスト体験、おさかな館・芝不器男記念館見学
8月10日(木)	学習指導3	人心緑化学習会、バーベキュー
8月11日(金)	学習指導4	林間学校閉校式

例年は五日間に渡り実施されていたが、今年は台風五号の影響によって一日短くなっってしまったため、大学生が楽しみにしていた四十川支流である滑床溪谷の中で、大自然とスリルを味わうことのできるキャニオニ

ングが中止になるなどの日程の変更はあったが、全体を通しての流れは表のようになった。

松野中学校の三年生との思い出

教育学部数学教育専修

四回生 琴井谷朋代

今年の松野中学校の三年生は三十一人で、先生方からは、「この学年は、一人一人は賑やかだけれど、みんな集まると静かになる。」というお話を聞いていたので、四日間どんな感じになるのかなと思っていました。昨年も参加した経験を生かし、リーダーとして成功させるために何度も集まって話し合いを重ねてきたので、責任をひと



朝

りするうちに不安もどこかに消えて笑顔になり、次の日に中学生に会うのが楽しみになった。数学が苦手な生徒にとっては、三時間の数学の学習は大変に感じていたかもしれない。だが、日を重ねるごとに、自力で解こうと努力する姿が多く見られた。復習プリントは、宿題としていなかったのに、自主的に家庭で解いてきている生徒もいて、「先生、頑張ってきたよ。」と笑顔で言われた際には、もつと



学 習

の影響でキャニオニングがなくなったので仲良くなれるか不安であった。松野中学校では、午前中三時間の数学の学習が行われた。中学生は1グループ3人、全部で十グループに分かれ、十人の大学生がそれぞれの班についていた。数学の学習では、中学生が夏休みに解いてきた入試問題の解説を行ったり、復習プリントを解かせたりした。始めは、お互いに緊張していたが、休憩時間に好きなもののお話をしたり、学校生活について聞いた



人心緑化 (進路学習)



人心緑化

力になってあげたい、応援したいと感じた。また、大学生は、中学生たちにわかりやすく教えるにはどうしたらいいだろうかと考えたり、みんなのために何かしてあげたいと思うようになったりするなど、大学生自身も成長できる良い機会になった。

三日目の人心緑化学習会では、大学生二十名全員が参加をした。大学で準備してきた教材を使い、中学生たちにこれからの自分の生き方について考えてもらった。劇や写真、動画を見せながら、大学生が今までに体験してきたことを話したり、中学生たちには広い視野を持つて様々なことに積極的に挑戦してほしいことを伝えたりした。また、中学生たちには、



バーベキュー

【松野中学校生愛大訪問】
林間学校が終わって二か月後の十月、松山市へ遠足に来た中学生が、昼食を兼ねて愛大にちよつとだけ寄ってくれた。この交流もかれこれ六年になる。学食で好きなものを取って食べる中学生は少し緊張しているようだが、嬉しそう

自分のことを紹介する機会を設け、現在の自分自身のことを改めて知ってもらい、将来どうありたいかを考えさせた。大学生にとっては、一からの準備がとて大変ではあったが、人心緑化学習会が終わった後の中学生たちの満足した様子を見て、頑張った良かったなど実感できた。その後は、保護者の方々が準備してくださったBBQを楽しんだ。先生方からは、「こんなに楽しそうで見ているのは初めてだ。」とおっしゃっていた。中学生にとっても大学生にとっても、一生の思い出となる時間を過ごせた。

でかわいい。久しぶりに会って、
会話も弾み、再会できた喜びをお
互い感じることができた。

この林間学校では、松野中学校
の生徒、先生、保護者、地域の方々
など松野町全体が、私たち大学生
のことを温かく迎え入れてくれ
た。私たちは、この出会いをずつ
と大切にしていきたい。また、一
緒に頑張った大学生の仲間とのつ
ながりも大切にしたい。人との出
会い、人とのつながりを大事にし、
これからの人生を歩んでいきたい
と思った。



遠 足

ありがとう 南小学校
目黒の心忘れない

教育学部社会学科教育専修

四回生 山川 義弘

松野町には東西南の三つの小学
校があり、児童数は三校合わせて
も約百五十人である。私は全校児
童約四百人という環境で育ったこ
ともあり、小規模校のイメージが
持てず、どういった学校生活を
送っているのか興味があったこと
もあり、今夏の松野町林間学校に
参加した。

子どもたちは夏の日差しで日焼
けをし、「この前、山でカブトム
シを取ったよ!」「夏休みは川で
よく遊んだよ!」と元気に満ちた
様子であり、どこか懐かしく感じ
られた。

林間学校は、大学生二十人は中
学校組と小学校組で十人ずつに分
かれて活動をした。四日間のうち
二日間は、小学校組はさらに半分
に分かれて、東小と南小を訪問し



学 習

た。私は他四人の大学生の仲間と
共に、松野南小学校を訪問した。
この松野南小学校は今年度で廃校
となり、卒業する二名を除く在校
生は来春から松野西小学校に通学
する。ここに通う全校児童六名
は、学年を越えてとても仲が良く、
年上の子は年下の子に対してとて
も優しく接していた。私は、そん
な子どもたちと一緒に勉強をした
り、蛍の幼虫の放流や川遊びをし
たりした。私たちは、蛍の幼虫を
見たのは初めてで、目黒川ほどこ
いいな川で泳いだのも初めてだっ
たので、本当に良い経験のできた
林間学校だった。数日前に台風が



川遊び



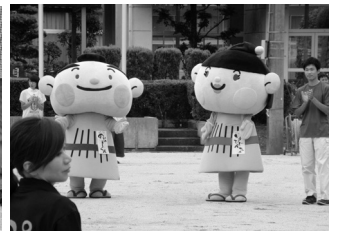
レクリエーション

通過して水かさがいっ
もよりも増していたよ
うだったが、子どもた
ちは流れに負けること
なくたくましく、楽し
そうに泳いでいた。私
たち大学生は子どもた
ちの様子を見ていた
が、子どもたちから楽
しそうな声で「先生も
一緒に泳ごうよ!」と
いう誘いもあり、気
づいたときには私も
ジャージ姿のまま子ど
もたちと一緒に泳いで
いた。

林間学校を通して、
小学生の元気の良さを
感じられただけでな
く、半日ほどしか関われなかった
中学生の子が、最終日にお礼の手
紙をくれたという心の温かさに感
動した。

【松野南小の運動会に参加】

時は経って九月二十四日。松野
南小学校最後の運動会に私たちも
参加した。私たちは、最後の運動
会が子どもたちにとって、また目
黒集落の人々にとって、より良い
ものになるようにという思いで、
スムーズな運営ができるように準
備や片付けの手伝いを行うつもり
で参加した。しかし、地域の人か
らのお誘いもあり、私たちも競技
に飛び入り参加をして、楽しませ
ていただいた。



運 動 会

タイトルにある「ありがとう
南小学校 目黒の心忘れない」は
校舎に掲げられていたものであ
る。約百四十年という長い歴史の
中で、この小学校で多くの子ども
たちが学び、成長してきた。ある
六年生の子が「南小はなくなつて
も南小での思い出はみんなの心に
残り続ける」と言った。南小での
思い出を胸に、松野町で育ったこ
とを忘れず、これからも元気に羽
ばたいてほしい。南小の子どもた
ちだけでなく、松野町の子どもた
ちは、これからもみんな仲が良く、
心優しく、松野町で育ったことに
誇りを持って、これからの人生を
歩んでいってほしい。

《第1回科学イノベーション挑戦講座》を実施しました 【8月6日(日)】



科学イノベーション挑戦講座は、国立研究開発法人科学技術振興機構のジュニアドクター育成
塾事業の支援を受けて実施されています。

平成29年8月6日(日)、「伝える」プロである愛媛新聞社の協力を得て、愛媛新聞社報道部の白
川英樹副部長を講師としてお招きし、「見る、聞く、まとめる、伝える」発信力をテーマに、伝
える技術の養成講座を実施しました。

愛媛新聞社は、愛媛県を代表する新聞社です。愛媛から世界に発信する本学の業績について紙
面を通じて伝えていきます。専門家による新しく、難しい業績を中学生にも伝わるようにわかりや
すく表現するための「伝える」コツについて説明いただきました。

「伝える力」は、理系人材にとってもっとも重要な力の一つです。
たとえば、スティーブ・ジョブズやビルゲイツのようなIT界の偉
人、山中伸弥教授や大隅良典京都大学名誉博士、大村智北里大学名
誉教授のようなノーベル賞受賞者は、いずれも優れた伝える力
を持っています。大きな仕事をするためには、多くの人の力を結集し
なければなりません。どれほど優れた力を持っていても一人ででき
ることは限界がありますが、多くの人が集まることで個人の限界
を超えた仕事ができるようになります。

今年度は、今後も愛媛新聞社のご支援を賜り、テーマごとに6つの新聞作成を予定し
ています。

※この模様は、愛媛新聞社の2017年8月8日付10ページ「未来の博士 科学に熱中」で
報道されました。



2017年8月8日付

「未来の博士 科学に熱中」

四国教職大学院連携推進に係る共同実施型授業（試行）に挑戦しました 【8月29日(火)、30日(水)】

平成29年8月29日(火)及び30日(水)の2日間、愛媛大学・鳴門教育大学・香川大学教職大学院による連携推進事業「共
同実施型授業」を試行しました。各県にある教職大学院をインターネットでつないだ授業形態は、全国的に先駆的な
取組です。

1日目は、愛媛大学が発信校、鳴門教育大学と香川大学が受信校となり、本学大学院教育学研究科の露口健司教授
が「学校組織のリーダーシップ」と題するテーマで講義し、演習・協議を行いました。2日目には、鳴門教育大学が
発信校、愛媛大学と香川大学が受信校となり、鳴門教育大学の久我直人教授が「効果ある学校づくりの理論と実践」
と題して講義し、演習・協議を行いました。2日間でのべ70人近くの現職院生の参加があり、大変有意義な学習機会
となりました。

受講生からは、「他の大学院の現職院生との交流の機会を通して、愛媛では学べない新たな知見を得ることができた」
「他の教職大学院の雰囲気を知ることができた。今後とも交流を深めたい」等の意見が寄せられました。



発信の様子



他大学からの送信画面に見入る様子

小学校英語教科化に向けた専門性向上の認定講習を開始します

本学教育学部は、平成32年に改訂される「次期学習指導要領」実施に伴う小学校の英語教科化を受けて文部科学省が実施する「小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業」に申請しておりましたが、正式に採択され、受託事業を開始いたしました。

今年度（平成29年度）は、対面形式の認定講習（5講座）と通信制の認定講習（3講座）を開講いたします。

本講習は、小学校の現職教員が、中学校教諭二種免許状（外国語（英語））の取得に必要な単位を修得し、小学校における外国語教育の専門性の向上と、その指導体制の充実を図ることを目的としています。

開講科目は、以下の8科目です。

- | | |
|----------------|--------------|
| (1) 対面形式の認定講習 | (2) 通信制の認定講習 |
| 英米文学A | 英語学A |
| 授業英語コミュニケーションB | 生徒・進路指導論 |
| 授業英語コミュニケーションC | 教育相談 |
| 授業英語コミュニケーションD | |
| 英語科教育法 | |

*開講時期・最終試験については、実施要項をご参照ください。

*②の通信制の認定講習は、1科目1,500円の受講料がかかります。受講料は通信システムの登録料とユーザーIDの使用料として徴収し、受講者負担とします。

お問い合わせにつきましては、以下をお願いします。

〈お問い合わせ先〉 愛媛大学免許法認定講習・認定通信教育事務局（Tel:089-927-9517）

教育学部留学生歓迎会を開催しました【10月24日（火）】

平成29年10月24日（火）、教育学部本館2階会議室で、教育学部留学生歓迎会（後学期）を開催しました。教育学部では、今年度10月から新たに2人の留学生を迎え、現在8人の留学生が在籍しています。歓迎会には、留学生、教育学部長、指導教員、国際交流委員会委員、留学生チューター及び事務職員が一堂に集いました。

国際交流委員会委員長長の立入裁教授の司会のもと、佐野栄教育学部長の歓迎挨拶があり、乾杯でパーティが始まりました。その後、留学生が紹介され、それぞれ日本語や母国語で自己紹介を行いました。歓談を通して交流が行われ、和やかな雰囲気の中で閉会となりました。留学生の皆さんにとって、本学で過ごす留学生活が有意義なものになるよう願っています。



佐野栄教育学部長の歓迎挨拶



歓談の様子



職場だより

出会いと経験から 得るもの



西条市
東予西中教諭
曾我部有衣子
(平二六卒)

四年間ともに音楽を学んだ仲間たちと、涙を流しながらお別れをしたことがついこの間のことのように思い出されます。あれから四年。大学の四年間もあつという間だったけれど、卒業してからの四年間は、もつと早く過ぎていったように感じます。「学校の先生」としての生活は、学生時代に想像していたよりもずっと大変なもので、想像していたよりもずっとずつと、喜びもやりがいもあるものでした。

胸に、着任の日を迎えたことを覚えていています。

四月の一年生は、小学生とはいえ、まだまだ幼稚園や保育園を卒園したばかり。歌を歌っていたかと思えば、一瞬の隙にピアノの下に潜り込んでいたり…楽器を演奏すると、気づけば取り合いのけんかになっていたり…最初は対応の仕方わからず、何か起きるたびにあたふたと慌てるばかりでした。三年生になるとまた、難関の「リコーダー」が登場します。私が話をしていてもピーピー音を出し始めたり、吹けなくて泣き始めてしまったり…。毎日毎日失敗を繰り返して、授業を終えるたびに、「こんなんじゃないやめだ」「この仕事向いてないんかなあ」と自己嫌悪に陥り、ため息をつく日々でした。

しかし、そんな私を元気づけてくれたのも、紛れもなく子どもたちでした。休み時間には音楽室に遊びに来て一緒にピアノを弾いたり、楽しいお話をしてくれたら。毎日、数え切れないほどの笑顔がくれました。だからこそ、悩

むたびに「もつとこの子たちが楽しめる授業をつくらう!」「音楽が楽しいって思ってもらいたい!」と、思い直すことができました。

そして子どもたちだけでなく、新米の私を心強く支えてくれたのが、先生方でした。右も左も分からない私をいつも気にかけてくださり、何を尋ねても、嫌な顔せず丁寧に教えてくださいました。教

員採用試験に向けての勉強に関しても、そうです。大学生の頃とは違い、仕事がある毎日。働きながら、どのように時間を使って勉強を進めたらいいかアドバイスしてください。試験前には面接練習も時間を割いて熱心にしてくださいました。学級経営、校務分掌、授業、仕事は本当に盛りだくさんだったはず。無事に中学校音楽教員として採用していただくことが決まったときも、先生方は自分のことのように喜んでくださいました。本当に、温かい先生ばかりでした。

講師として勤務した一年間は、私にとって、なくてはならない一年間だったと心から思います。悩みに悩んだ授業は、教材研究だけでなく、先生方から授業づくりのアドバイスをいただいたり、他校の音楽の先生の授業を見させてい

ただいたりする中で、多くのことを学びました。授業でのルールをはっきりさせること、一人一人の能力を考えて、ゴールを一つだけにしないこと。そういったことを少しずつ実践していくと授業もだんだん軌道に乗ってきました。小学校での授業づくりは、中学校での授業づくりにつながっていることを今、実感しています。

一年間を終え、初任者として初めて赴任した西条市。知り合いもほとんどいない町で人生初めての一人暮らし。不安いっぱいでの新生活が始まりました。小学校と中学校のギャップにも最初は慣れない部分もありましたが、ここでもまた、私を支えてくれたのは子どもたち、先生方、同期の方々でした。つくづく私は、人に恵まれていると感じます。また、部活動は、音楽部(吹奏楽部)の顧問を務めています。小学校でも、ありがたいことに吹奏楽部の指導をさせていただいたことが、ここでもまた生きました。赴任したときは吹奏楽コンクールに出場歴がなく、せっかくな吹奏楽をやっているのに出ないなんてもったいない!と思った私は、まず吹奏楽コンクール出場を目標にしました。二年

目、初めての吹奏楽コンクール大会。結果は銅賞。出場の目標は

叶ったけれど、次なる目標はもちろん、金賞。基礎練習や基礎合奏をそれまで以上に徹底しました。三年目、二度目の県大会。結果は金賞。三年生が涙を流しながら喜ぶ姿を見て、これまで指導についできてくれた部員たちに感謝の気持ちでいっぱいになりました。

講師から始まった教師生活。私にとって無駄なことは何一つありませんでした。失敗、後悔、喜び、そして人との出会い。どれも今の私を作る大切な宝物です。人との出会いを大切に、そして出会った人への感謝の気持ちを忘れず、これからも新たな目標に向かって経験を積み重ねていきます。

☎ 799-1322
西条市国安
九九六番地



学んだこと



久万高原町
畑野川小教諭
亀岡 美咲
(平二五卒)

教員になり、五年が経とうとしています。大学を卒業してから、あつという間でした。初任校で三年間お世話になり、現在の勤務校である畑野川小学校にやってきました。畑に野原に川、と書く字のごとく、山の中にある自然豊かな学校に勤務しています。昨年度からは、特別支援学級の担任をさせていただいています。

私が特別支援教育に興味を持ち始めたのは、中学校での職場体験がきっかけです。ある小学校の特別支援学級で職場体験をさせていただきました。それまで、障がいをもつ子は自分と違う所がたくさんあるのではないかと思っていました。しかし、異なる部分はあっても、自分と同じところがたくさんあることに気付きました。特別支援学級の担任の先生が、

「私たちの仕事は、介護のように、できないことを代わりにして

あげることはありません。子どもたちが、自分の力で生きていけるように手助けする仕事です。」と教えてくれました。障がいの有無に関わらず、子どもたちが自分らしく生きていけるために、先生方は働いているのだと学びました。

大学に入り、私は、特別支援教育の勉強を始めました。附属特別支援学校での実習では、担任の先生から指導を仰ぎながら、他の実習生と協力をして授業研究をしました。その時に、「最小支援」という言葉を教わりました。子どもたちが、他からの援助を最小に、自分一人でする力を身に付けることです。しかし、最小支援といっても、教員ができるだけ支援をしないということではありません。他の人からの手助けがなくても、自力でできるような環境を整えてあげることが必要です。私たちのグループは、「ゲームコーナーを開こう」という単元の授業研究に取り組みました。子どもたちが、力を合わせてゲームコーナーを運営できるように、一人ひとりにそれぞれ役割を与えました。それぞれのもつ力を最大限に生かせるよう、実習生同士でアイデアを出し合いながら、補助具を作りまし

初任校での三年間は、通常学校で担任をしていたため、特別支援教育に直接携わるようになったのは、本校に勤務するようになってからです。受け持つのは、知的障がいのある、小学五年の女の子と聞き、どんな子なのかと会うのがとても楽しみでした。初めて会った時、目が合い、にっこりと笑った顔を見て、ほっとしました。

しかし、それも束の間、授業を組み立てることの難しさに直面しました。準備した教材・教具が、思うように子どもの実態に合わなかったのです。何度も調整しましたが、うまくいかないことばかりでした。その時は、彼女にとつても、しんどかったと思います。時間が経つにつれて、少しずつ得意なことや苦手なことが分かってきました。

彼女は、今年六年生になりました。来年は中学生です。自分でできることを増やしていくために、日々取り組んでいます。

今、大学で学んだ経験を活かして、「お店屋さんを開こう」という単元をしています。おもちゃ屋、ケーキ屋、ゲーム屋の三つのお店を準備し、友だちを招きます。普段は、誰かから教えてもらうことや、やってもらうことが多く、彼女が中心となって活躍する場がな

かなかありません。そのため、してもらうことが当たり前で、受け身になりがちです。また、彼女は、誰かのために何かをしてあげるのが好きですが、自分一人の力では難しいことがあります。例えば、友だちに分からないことがあったら教えてあげたり、自分で作ったお菓子や物を、誰かにプレゼントしてあげたりしたいという思いをもっています。しかし、友だちの方が上手にできたり、自分にはできるという自信がなかったりして、なかなか自分から進んですることはできません。そこで、お店屋さんごっこを通して、成功体験を積みませ、少しずつ自信を持たせたいと考えました。お店屋さんには、彼女が好きなものや得意なことを取り入れました。それにより、彼女が中心となり、友だちに教えてあげたり、代わりにしてあげたりする機会を設けることができました。役に立つことの喜びや、人を楽しませることのうれしさを味わってほしいと思いつつ、一緒に

にお店屋さん準備をしました。

やがて、実際にこのお店屋さんを開き、友だちを招待する日がやってきました。活動の中で、「ありがとう。」という言葉や、皆さんの友達に言ってもらいました。その言葉を聞いた彼女は、うれ

れしそうな笑顔を浮かべていました。また、終わった後も、「友だちがみんな喜んでくれた。」と、何度もつぶやき、嬉しさを噛みしめているようでした。家に帰ってからも、楽しかったことを家族に話すことができたようです。

障がいの有無に関わらず、「誰かのために働く」ということは、自分らしく生きるために必要なことだと思えます。人にとって究極の幸せとは、

人に愛されること
人に褒められること
人の役に立つこと
人から必要とされること

であると、聞いたことがあります。それは、自分自身にも言えることです。子どもが「やったあ。」で喜ぶようになった。」と喜んでくれる笑顔を見ると、私も嬉しくなります。役に立って良かったな、と思います。これから、子どもたちと一緒に、自分自身も成長しながら、子どもたちの夢を応援できる教師になれるよう、努力を続けていきたいです。

791-1211

上浮穴郡
久万高原町上畑野川
甲五二二番地(一)

出会いに感謝



大洲市
大洲小教諭
河野 覚志
(平一六卒)

した。同期の仲間たちや先輩方。その多くが愛媛で教師をされており、研修などで出会う度、自分も負けないように頑張らなければという刺激をもらっています。

愛媛大学を卒業し、早いもので十四年が経ちました。教師として十四年目。あつという間に過ぎた日々でした。今回、同窓会報を執筆させていただくのを機にこれまでを振り返ってみると、自分がどれだけ多くの方々に支えられていたかを改めて感じることができました。

まずは、私に愛媛大学への進学を進めてくださった当時の担任の先生。高校三年生、教師になりたという思いをおぼろげながらに抱き始めていたころ、「愛媛で教師になりたいなら、愛媛大学に行きなさい。」と背中を押してくださいました。あの一言がなければ、愛媛大学を目指していなかったかもしれません。大学でも多くの出会いがあります。

採用後にも、多くの先生方との出会いに支えられました。大きな研究会を控え、お忙しいにもかかわらず、初任者担当として、一から教師の仕事を教えてくださいました。三年目、初めて体育主任を任されたとき、「自分の思うようにすればいい。」と背中を押してくださいました先生。自分が悩んでいるときに決まってお飯に誘っていただき、話を聞いてくださった先生。まだまだ若手の自分を信じて、大きな仕事を任せてくださった先生。チームとして仕事をするこのの面白さを教えてくださいました先生。多くの先生方との出会いに恵まれたことにも、感謝しなければなりません。

中でも、大学時代の一番の出会い。教育実習を担当していたいた先生との出会いです。付属小学校での一箇月間の実習を通して、「絶対に教師になる。」という思いを強く持ちました。それは、その先生の子どもに対する熱い思いを感じたからです。教師という仕事のおもしろさ、奥深さ、そしてやりがいを見せてくださった先生には、感謝の気持ちしかありません。

また、四回生の時に行った応用実習で担当していた先生からも、多くのことを教えていただきました。その先生が言われた「学校では、自分のことより周りの先生の動きを見なさい。そして、自分が手伝えることがないかを考えなさい。それが自分を成長させる近道です。」この教えは、今でも自分の中にしっかりと残っています。

す。初めての異動の時、二年間受け持った子どもから「先生はずっとお前ならできると言ってくれた。中学校でも頑張ります。」という手紙を受け取ったときには、教師になってよかったと心から思いました。

不登校の子どもを受け持ったときには、自分にできることを見つけることができず、何も改善できないまま卒業を迎えてしまったことでもあります。無力感と悔しい思いでいっぱいでしたが、その後、今は一社会人として仕事に励むその子どもと再会し、小学校の思い出話を笑顔で交わすことができました。自分にできたことは何もな

いと思っていました。が、わずかもその子の中に何かを残せていたことが分かり、「無駄なことはいつもない。自分にできることを一杯やろう。」という気持ちを強く持つことができました。放課後の体育指導に携わるようになり、子どもたちに厳しい練習をさせていたにもかかわらず、大会が終わった後、「この優勝旗は

先生のためにとったけん、先生が持つて写真をとらないけんよ。」と子どもが言ってくれたときには、照れくさいながらも、とてもうれしく、思いは通じることを実感しました。

振り返れば、まだまだたくさんのお出来事があります。ただ、間違いないと言えるのは、今の自分があるのは多くの人とのお出会いがあったからだということです。これからの出会いも大切にしたいと心から思います。そして、子どもに、「先生に出会えてよかった。」と言ってもらえるような教師になることが、今の私の目標であり、夢でもあります。そんな教師を目指して、これからも努力し続ける人間でありたいと思います。

大洲市新谷乙
795-0071
五五六一三



私と本



八幡浜市

真穴小教諭

石原 妙子

(平一六卒)



私は本を読むことが好きであ

る。新築の計画を練っている時に
最初に考えたのが、本棚の位置で
ある。居間に置くと邪魔になるの
で、玄関から居間まで続く廊下に
床から天井まである大きな本棚五
本を作り付けし、そこに本を収め
ることにした。だから家に来たお
客さんは皆「本が好きなんです
ね。」と口を揃えて言う。私はい
つも「そうなんです。」と答える。
教師になって七年経ったが、その
中で出合った本や本にまつわる思
い出を振り返ってみたい。

教師一、二年目は、松山市立潮
見小学校でお世話になった。それ
まで学校で講師の経験をしたこと
がなく、初めての学級担任だった。
毎日の授業準備、保護者対応、初
任者研修……やることが山ほどあ
り、帰宅するのは深夜になること
が多かった。分からないことだら

けで、周りの先生方には迷惑ばか
り掛けてしまった。学級経営も上
手いかず、子どもたちに申し訳
ない気持ちで一杯だった。そして
深夜になって自宅に帰り、ぐっす
り眠る三歳の我が子を見ながら、
母親らしいことも何もできずに情
けない気持ちで一杯になった。そ
んなある日、先輩の先生から、「娘
さんに読み聞かせしてあげよう？

容の絵本だ。自転車に乗せてもら
い父親と保育園に通う我が子は、
自分と同じ主人公を気に入り何度
も何度も読んだ。私も夫も文章を
丸ごと暗記してしまうくらい読ん
だ。絵本の読み聞かせは、現在三
歳の次女に引き継がれ、毎晩寝る
前は、次女は読み聞かせ、十歳の
長女は隣で好きな本を読む時間と
なった。

現在、真穴小学校では、特別支
援学級の担任をしている。今年度
は毎日のように「おおきなかぶ」
(A・トルストイ再話 佐藤忠良絵)
を読み聞かせしている。毎日読ん
だら飽きるのではないかと大人は
思うが、子どもたちは毎回楽しん
で話を聞く。何度も繰り返し話の
構成は子どもたちに心地よく、決
まり文句の「うんとこしょ、どっ
こいしょ。」を今か今かと待ち構
えている。そして、みんな「う
んとこしょ、どっこいしょ。」と
目の前に大きなかぶがあるかのよ
うに音読する。やつとこさかぶが
抜けると、みんな「やったー。」
と喜び合う。毎日同じ絵本を読ん
でいるはずなのに、毎日新鮮な気
持ちでその日のかぶを引っ張るの
である。純粹に本を読むことを楽
しんでいる子どもたちの姿を見て
いると、本を読むという行為の素
晴らしさや奥深さをしみじみ感じ
る。

て頂き、何とか教員を続けられて
いることに改めて気付くことがで
きた。まだまだ教師として人間と
して未熟なところがあり、日々ど
う行動し、どうあるべきか自問自
答している。それでも、昨日より
今日、今日より明日と少しずつで
も成長できるよう、よく考え、よ
りよく行動できる人間でありた
い。

寝る前の五分や十分でいいけん絵
本を読んであげるといいよ。私も
忙しいけど、それだけは毎晩やり
よるんよ。」とアドバイスを頂い
た。何一つ母親らしいことができ
ていない私であったが、その話を
聞いてから、我が子に読み聞かせ
だけはしてあげようと思うようにな
った。それから毎晩、子どもが
寝る前に絵本を読むのが習慣にな
った。仕事が忙しくて子どもの
寝る時間に間に合わない時は、夫
にお願いして読んでもらった。そ
の時にいろいろな絵本を読んだの
だが、親子で一番のお気に入り
だった絵本が「いつてらっしゃー
い いつてきまーす」(神沢利子
作・林明子絵)である。この本は、
父親が子どもを自転車で保育園へ
連れて行き、保育園が終わると母
親が子どもを迎えに行くという内

教師三年目から現在までは、八
幡浜市立真穴小学校で勤務してい
る。我が子の読み聞かせのおかげ
で子どもの本をよく買うようにな
り、学校でも本の読み聞かせをす
ることが増えてきた。そんな時に
出合った本が「一冊の本が学級を
変える」(多賀一郎著)である。
この本には、読書や読み聞かせの
大切さが書かれている。また、こ
んな子どもにはこんな本を紹介し
たらよいという具体例が載ってい
て、大変参考になる。この本を
きっかけにして「おこだでませ
んに」(くすのきしげのり作・
石井聖岳絵)や「十二歳たちの伝
説」(後藤竜二作)など子どもが
読んでも大人が読んでも心にじー
んと響くよい本に出合うことがで
きた。私の読書の幅を広げてくれ
ている。

このように本との出会いを振り
返ってみると、本の内容だけでは
なく、本を読んでいた時にお世話
になった方々、読み聞かせをした
時の子どもたちの真剣な眼差し、
様々な思い出が鮮やかに蘇ってき
た。そして、いろいろな方に支え

これから我が家の本棚には、
新しい本が増えていく。本ととも
に様々な経験や人との出会いが
待っている。感謝の思いを大切に
し、日々精進していきたい。

(☎) 796-0911 西予市三瓶町
有太刀一九六番地



父の言葉



鬼北町

日吉小教諭

伊藤 大志

(平一五卒)

初任者として赴任した南宇和郡から、故郷である北宇和郡に戻ってきて八年間、体育主任として北宇和郡学校体育会に関わってきた。その中で、先輩方が、児童生徒の体力向上や運動の習慣化のために努められている姿を見て、多くのことを学ばせていただいた。そして、今年度、北宇和郡学校体育会の理事長を務めることになった。

父の仏壇の前で、理事長を務めることを報告しているとき、ふとある言葉を思い出した。それは、私が教員を夢見たきっかけである父の言葉である。

私は中学二年生のとき、部活動のキャプテンに任命された。父にそのことを話すと、
「リーダーはチームの土台だ。土

台が上に出れば、建物は崩れる。土台は下で頑丈に建物を支える存在にならなければならない。」と教えてくれた。

またある日、教員をしていた父に、教員の仕事について尋ねたことがあった。父は、
「大変な仕事もあるが、子どもたちのために努力し、仲間と協力した成果が、子どもの成長した姿として見られたとき、これほど幸せなことはない。」

確かに父は、朝早くから夜遅くまで、仕事をしていた。今考えれば、当時の我が家は、母子家庭のような状態であった。しかし、父のことを一度も嫌いになったことはない。一緒にいられる日は、野球をしてくれた。キャッチボールをしたり、ノックをしてくれたりした。

また、一緒に外出したときに、父は、出会った知り合いや教え子などたくさんの人に、いつも感謝の言葉をかけられていた。そんな父の姿が誇らしく、子どものころから今もお、父は尊敬する存在

である。

その父の言葉の重みを、今、強く実感している。

これまで、理事長を務められている先輩方の姿を拝見しながら、その職務の大変さを感じていたが、実際に務めてみると、様々な文書の作成や諸手続きの多さに驚いた。子どもの指導や校務と合わせて、忙しい毎日を送ることになった。しかし、父の言葉を思い出し、理事長として、組織の頑丈な土台となるよう、日々、努めている。

さらに、人と力を合わせることの大切さやすばらしさを、改めて感じている。

周りの先輩方は、アドバイスを求めると、嫌な顔一つせず、親身になって相談に乗っていた。そして、適切なアドバイスだけではなく、ご自身の失敗から学べたことまでも、教えていただいた。先輩方の支えは、本当に大きな存在である。

今年度、七月には北宇和郡小学校水泳競技大会を、十月には北宇和郡陸上競技大会を開催した。自

分にとつて、今年度の大会は、これまででの大会とは違うものだった。理事長として、様々な文章作成や手続きを行い、大会の運営の中心にならなければならないかった。無事に大会の開催を迎えることができ、大会が始まった。運営の中心として、児童の体調やタイムスケジュールなどに神経を注いでいる中、ふと、子どもたちや先生方の姿を眺めながら、感慨にふける自分がいた。

「共に運営してくださる体育主任の先生方や、大会役員として参加してくださる方々がいるからこそ、こつこつと大会を開催することができている。そして、子どもたちが活躍し輝き、成長することができている。」

実感を伴ってそう感じていた。高温多湿の会場で汗を流しながら協力してくださる方々や、早朝から会場準備に携わってくださった会場職員の方々に対し、上辺ではなく、心の底から感謝することができた。

理事長の職務は、これからも続いていく。より頑丈な土台となり、組織をしつかりと支えられるよう、精進していきたい。そして、子どもたちの成長と幸せのために、多くの人と力を合わせていきたい。

父の言葉を胸に、尊敬する父に少しでも近づくことができるよう、自己を磨いていきたい。

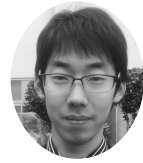
☎
798-1321

北宇和郡鬼北町
大字小倉九二六番地



教育で

社会を変える



新居浜市 新居浜商業高教諭 副島 丈義 (平二六卒)

「教育で社会を変える」。そう豪語して教員となり、今年で四年目を迎える。私の信念は、「社会は人がつくっている。ということ...」

でも、理想が先行しすぎて生徒のことが見えていなかった。から回る自分と、苦笑いの生徒...。今考えたら、ああ恥ずかしい。もつともつと生徒の姿を見なければいけなかった。人と関わるということがどういふことなのか、ましてや人を教え諭すということがどういふことなのか学んだ。

三年目、やるべき仕事が増えてきて充実感も増してきた。しかしその反面、仕事に追われて帰宅が遅くなったり、やるべきことをうっかり忘れてしまったというミスも増えてしまった。「忙しい」という字は「心」を「亡くす」と書くが、まさにそのような状態であった。何回「すみません」と言っただか覚えてない。間違いなく自分の中で流行語大賞である。今考えたら、何と情けない。社会人としてきちんと仕事をするのがどれだけ大切なことか、当たり前のことを当たり前にしなければ自分の評価を落とすことになるし、多方面に迷惑をかけることを痛感した。

「どうせ先生なんて」「大人なんて」という言葉が聞こえてくるたびにドキッとする。自分は先生なんだ。大人なのだ。ちょっと前までは子どもでもないけど大人でもないよなあという感覚だったが、教師になってから「もう自分は一前前の大人として子どもに何かを伝えられる存在でなくてはならないんだ」と痛感している。自分の明確なヴィジョンを持っているか。自分の都合でものを言っていないか。ちゃんと真正面から生徒と向き合っているか。自らが真理を求め、学ぼうとしているか。熱意を持っているか...。そうやって自分を振り返りながら、教師として誇りを持って生徒の成長を支え、生徒の力を伸ばせるようにパワーアップしていきたい。「教育で社会を変える」——いつか自分の教え子たちが、社会を変え、社会を支え、皆が幸福に生きていく社会を築いていくその日を夢見ながら。



原稿募集

- ★ 次号 第二百二十六号
★ 「会員の声」・「今、教育に思うこと」について、ふるってご投稿ください。
★ 同期会や支部同窓会などの集いや活動について
★ 恩師・先輩・同僚の訪問や思い出について
★ 職場の近況や所感や活動について
★ 文芸(随想・俳句・川柳・短歌・詩・絵手紙等)について
★ 会員便り
★ 旅行記 4この頃思うこと
★ 2季節便り 5忘れ得ぬ人など
★ 3教育雑感
※ 投稿が多数になった場合には、編集委員会で選ばせていただきますので、ご了承ください。
★ 原稿メット 四月三十日
★ 発行 七月一日 予定
★ 字数
★ 依頼者以外は千二百字厳守
★ 四〇〇字詰原稿用紙の一行を十五字にして書いて下さい。
★ 写真
★ 筆者の顔写真を添付してください。顔写真以外で内容に関連した写真もあれば送ってください。



先輩を偲ぶ

林傳次先生遺稿集

「把翠」を繙く(十六)

「巻頭言」集 『愛媛教育誌』より

読書の思い出

わたしの生れたのは福井県の農村、本屋——といっても文房具や雑貨をならべた店の一隅に、少しばかりの雑誌や書物がならんでいるに過ぎない——のある町までは二里半の道のりがあった。しかもわたしの少年時代は今から五十年前、明治三十年代の中頃であるから、その頃の都会の少年の多くが親しんだあの「少年世界」も、一年に一冊か二冊読んだにすぎなかった。

小学校の一年の時、珍らしい病氣——今のネフローゼというものらしい——にかかって、六月頃から十月頃までも医薬に親しんでからは、健康の回復がはかばかしくないのも手伝って男の子らしい戸外の遊びにはあまり興味がなかった。三年の頃だったか、祖父の家の土蔵の二階で、絵入の草双子の何冊かを見つけて、それを貰って帰り、読みふけた事を覚えていたが、江戸の色街の生活を描いた

ものだったから面白がるはずはなく、標題さえも忘れてしまった。適当な読物がないものだから、手近にあったそれによって読書慾ともいべきものを満たしたに過ぎない。

読んだもので書名を覚えていた最初のもは「近古史談」である。これは戦国時代の武将の逸話を集めたもので、漢文で書いてあったとはいえ、内容は面白いものであった。近所にいる叔父の所へ、村の若者が二三人夕食がすむとやってきて、ならっているのがこれであった。叔父が読みを教えているのをそばで聞いていると面白いので、わたしも仲間に入れてもらったのである。この近古史談に引き続き「日本外史」の素読もなされた。この素読は二三年続いたが、村の若者が一人減り二人減りして、とうとう最後の一人もやめてしまったので、叔父の方からやめてしまった。

高等科二年生——今の六年——の時、町へ出た機会に本屋をのぞくと、博文館から出している「世界偉人伝」の中の幾冊かが目についた。一人の伝記を少年向に六七十頁にまとめたもので、たしか一冊が十銭であった。「林羅山」と「中江藤樹」の二冊を買った事も覚えていた。「中江藤樹」はそれまでになんか知らなかったから、また「林羅山」は同姓だったのに心惹かれて買ったことも不思議に覚えている。

その頃には歩くことも達者になって、町に出ることも一年に四五度はあるようになったが、その度に小遣いの中からこの世界偉人伝の二三冊を買ってくるのが何よりの楽しみであった。高等三年の時、やはりこの偉人伝の一冊「新井白石」を読んで、その読後感ともいべきものを作文の時間に書いて出したところ、先生が「これを読んでみよ」と貸して下さったのが和綴の「折たく柴の記」であった。引き続き「藩翰譜」も何冊か貸していただいた。これはさきに読んだ「近古史談」や「日本外史」とも似通ったところがあったので面白かったが、先生が他に転任せられたので読み終えることができなかった。

後任として赴任せられた先生は、絵もよくせられたが、新しい

文学にも親しんでおられて、その方面の私の眼を開いてくださった恩師である。先生が間借をしておられた家が、わたしの通学の道筋にあったので、帰りにお寄りしては本を借りたものである。村井弦斎、川上眉山、尾崎紅葉のものを読んで読んだのは、みなこの先生の蔵書であった。

高等小学校を出た翌年、二十町ばかりの隣の小さな町にはじめて雑誌を取扱う店ができて、「中学世界」やその頃はじめて出た「文章世界」を毎月見ることができるようになった。明治四十年で、自然主義の勃興してきた頃、それに関する論戦が「文章世界」の毎号を賑わしたが、もちろんそれを理解できる年頃ではなかった。そんな記事よりも読者の投書による文章や和歌を熱心に読んだものであった。

師範学校へ入学するにはまだ一年年齢が足りなかつたので、近くの学校に勤めたが、これはその学校の蔵書を手当り次第に読み得る機会を与えてくれた。その頃読んだもので記憶に残っているものは大町桂月や落合直文のもの、藤村詩集、それから「小学」や「論語」馬琴の里見八犬伝などである。数年前師範時代の旧友にあって往事を話しあつた時、師範の二年の国語に八犬伝中の「芳流閣上の格闘」

の一文があつた時、先生に指名されたわたしが、発端からここまでの概略をまる一時間を費して話したことがあつたと話してくれたことがあつた。わたしには全く記憶はないが、もしそんな事があつたとしたら、それはこの小学校にとめていた時読んだ記憶がまだ残っていたからであろう。

(昭和二十八年八月、
国語教室第二十六号)

祝・叙 勲

(平成二十九年十一月三日)

☆瑞宝双光章

教育功勞

浅野 保夫 殿

宇和島市光満甲二二一
(昭和四十五年卒)

教育功勞

小田 直行 殿

砥部町川登二〇九六
(昭和四十五年卒)

教育功勞

横山 完次 殿

西条市飯岡二五六五一—三
(昭和四十五年卒)

恩師からの便り

愛媛大学教育学部に着任して

元愛媛大学教育学部教授

影山 昇

(昭三五卒)

「同窓会報一二四号」の叙勲欄に、昭和四十四年卒の山本博・池田恩四郎両氏の名前に接し懐しく、私の愛媛大学教育学部赴任当時のことを思い出しました。

昭和四十二年四月赴任当時の教育学研究部の構成は宮本七郎先生を始め、掘田鶴好・黒田幸弘、山口透、金谷茂と私の六人で、私は「初等・中等教育原理」「日本教育史」「教育学演習」の四科目でした。

私が愛媛大学でお世話になったのは十七年六カ月間で、東京水産大学(現・東京海洋大学)に転出するまでの期間で、離任時にはすでに宮本・掘田・黒田の三先生はすでに故人となられており、その後、山口先生も後を追われております。当時の研究室のスタッフは金谷先生を筆頭に遠山順一・讃岐幸治、田中每実・南本長穂・山本

久雄諸先生がおられました。

私個人としては何よりも「愛媛県教育史」(全四巻・県教委)「愛媛県教育史」(思文閣出版・昭和五十八年)を地域に残すことができたことは幸いでした。家族も次女が生まれ、長女は松山東高校を卒業、次女は教育学部附属中学校を卒業でき、家族全員が地域の方々のお世話になり、心から感謝している次第です。

山本先生もすでに退職されておられ、現在の教育学の陣容もすっかり一新され研究・教育活動に従事していることと思います。

ますますの研究室の発展は勿論のこと、愛媛大学教育学部の進展を心より願っております。

(平成二十九年七月五日記す)

☎ 251-0045 神奈川県藤沢市辻堂
東海岸一七七一

職員会館の 利用案内

一、申込み方法

(1)宛先

〒790-8577

松山市文京町三

愛媛大学教育学部

同窓会事務局

TEL 089-927-9383

総務チーム内同窓会係

(2)方法

電話又は、はがき等文章でも可。但し、同大学内の「財務部財務企画課総務・照査チーム」作成の申込書(使用許可書)に必要事項を記入するため連絡方法を明記してください。

(3)申込期間

余裕をもって申込みと確實、少なくとも五日前までに

二、利用資格

大学の教職員及び同窓生

三、利用施設

●会議(大小四室)・会食

●宿泊(ツイン四室、シングル八室、和室八畳、十畳各一室)

●食事・料理

●料理、飲みもの共に可能

放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では平成三十年四月入学生(教養学部、修士専科生・科目生)を募集中です。

(募集期間)

平成二十九年十二月一日～

平成三十年三月二十日

放送大学はテレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など、幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々には、次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○放送大学の大学院を利用して、**専修免許状**の取得が可能です。

○放送大学の科目を利用して、**特別支援学校教諭免許状**の取得が可能です。

○放送大学の科目を利用して、**司書教諭資格**の取得が可能です。

○放送大学の講習を受講して、**教員免許更新**が可能です。

資料を無料で差し上げております。お気軽に**愛媛学習センター**にご請求下さい。



放送大学

教養はエネルギーだ。

一科目からでも学べます

平成30年度4月入学生募集中!

(平成30年3月20日まで)

問合せ先 **愛媛学習センター**

TEL 089-923-8544

●インターネットで資料請求・出願できます。 ●資料請求専用フリーダイヤル
放送大学 www.ouj.ac.jp 0120-864-600



川柳

百薬の長



西山 俊雄

(昭二二卒)

百薬の長と信じて飲むお酒

百薬の長も過ぎれば毒になり

言いくい事も言わせているお酒

お目当ては酒よりママのいい笑顔

明日はまた明日に任せて
生きる今日

夢だけは持ち続けよう生きる道

生と死がせめぎ合ってる人の道

死んでなおあなたの胸に
生きてます

愛という一文字光る媛の国

人生を幸せという字で終わりたい

ありがとうその一言が和ませる

体調のよい日薬をのみ忘れ

高齢になるほど増える物忘れ

老いてなおチャレンジさせる
好奇心

まだ若いつもりで選ぶ赤いシャツ

松山市小坂四丁目

一五七七

俳句

角切



久保田 由布

(ユズル)

(昭二四卒)

角切会神の御座所に燭一つ

角切の神事に鹿を寄らしめず

幔幕も張らず角切衆に見す

角切に角無き鹿も逃げ惑ふ

角切の鹿に技掛け押さへ込む

角切らる鹿の瞳何も見てをらぬ

角切らる鹿の目勢子が塞ぎやる

角切に獣医注射器隠し持つ

木の音を出して挽かるる鹿の角

角切られ鹿がすぐには立てぬなり

角切の修羅場足跡ばかりなり

角失せし大鹿の顔縮まりなし

角の無き雄鹿が雌鹿追ひ回す

角切の終はりし島に潮満ち来

私と俳句

初めて鹿の角切を見た。

様式化した行事だろうと思いついて
読んでいたので、素朴で生々しい
在り様に大いに感動した。何の
感傷もなく、スムーズに事が運ば
れるのが快かった。

上掲の私の句が、角切の説明や
報告に止まらず、一句でも、鹿の
いのちや人々のこころを、形を通
して浮かび出しておれば、いいと思
うのだが……

私が俳句と関わり合って、もう
五十年近くになる。私の俳句への
思いは、「俳句は文学だ」の一言
だ。さらに俳句は、「瞬間的な感
動をことばで表現するものだ」と
いうことだ。

(感動について)

私は行事が好きだ。長年の追っ
かけになつていけるものもある。ど
んど焼、寒泳、野焼、涅槃会、雛
流し、盆踊、万燈会、流燈会など、
毎年通い続けて、飽きもせず、下
手な句を作り続けている。

老いたがために感動が色褪せる
ことはない。伝統の中に見え隠れ
する、この地に息づいた人々の思
いや、目の前の生身の人々のい
のちが私の心を揺さぶる。こうし
た感動は、私の句の大きな種火だ。

もちろん行事だけではなく、俳
句のメインである花鳥風月も私を

夢中にさせる。桜、牡丹、滝、曼
珠沙華、渡り鳥などの季節になる
と胸が騒ぐ。

さらにもっと数多い日常生活の
中での俳句的感動、私は単純だか
ら、これらのものに結構夢中にな
り、孤りの時や空間を、むしろ楽
しんでいる。

(表現について)

表現について考える手始めは、
感動を五、七、五の音律にしぼる
ことだ。私は十七音を、俳句のた
どり着いた究極の音律だと思つて
いる。この形は制限ではなく、理
想の形なのだ。だからことばを
十七音でしごいて、美しい日本の
調べになるよう句を整えるわけ
だ。

文語についてもそうだ。文語の
簡潔さや、語感の力強さを考える
と、文語が俳句に最も効果的な用
語だと分かる。文語の特色をもつ
と發揮した句を作りたいと思う。

(名句の鑑賞について)

名句を味わう楽しさは、作句の
楽しさにまさる。にもかかわらず、
老いてくると、名句に触れること
も少なくなつてくる。老いた者ほ
ど名句に深い触れ方が出来るので
はないかと思う。いつか「愛誦句
を語る」会を持ちたいものだ。

北宇和郡鬼北町生田

一二七三

短 歌

戦時下、
終戦時を詠む

たゞならぬ御代にしあれば乙女子
も唯一筋に凛々しくとこそ思へ
かしこくも高松の宮殿下臣宣仁と
宣はせらる胸せまり涙さしくむ
熟れ麦に日こそ照りたれ青山の五
良津の谷は雲わきのぼる

戦災雑詠九首

爆音のきこゆすなはち焼夷弾落ち
あたり一面明るくなれり
敵機や、遠ざかれりとき、しかば
早く逃げよと妻子に叫びぬ
走りゆく妻子を見定め家内に再び
入りぬ何故ともなく

南に落ち東に落ちて我家にも遂に
落ちたり四発か五発

学校は風上にあり郊外を走る外な
しと東に走る

町外れの倉庫の蔭にふと会ひしは
すぐの隣の左川さんなり

幾度か夕立の如き音のして焼夷弾
の落つるをまさやかに見き

大御影安かりませとこひのみつ、
火影に明るき野地を走りぬ

女学校の講堂の屋根の炎上をイル
ミネーションの如しとたまゆら思
ひき

大御影背負ひまつれる三木部長の
手をひた握り言の葉もなし
飯食めば飢は足らへどされどこの
心の飢をいかにすべけむ

昭和二十八年六月山形、上の山に
ゆく 病後始めての旅なり
みちのくに入りしもしるし葉煙草
の広葉もいまだ三葉四葉にして

夕焼の空をそがひにそびえ立つ安
達太郎山のさやけき稜線
ふりさくる赤肌山は吾妻嶺かうす
き煙のひとつら二ひら

田の畔のすかんぼの花穂にいでて
漲れる水に苗はかそけし
(蔵王高湯途上)

朴の広葉とちの八ツ手葉つぎつぎ
にあらはれきつ、見れどあかなく
国原に六月の陽は照れ、とも蔵王
の嶺は雲のいざよふ

(林傳次先生遺稿集「把翠」より)

水 墨 画

水墨画とともに

和田 桂子

(昭三四卒)

四年ほど前、文教月報でふと目
にした「俳画・水墨画教室」の募
集に興味をいだき、「どなたでも
受講できる」との言葉に惹かれ、
早速応募した。時すでに喜寿を目
前にして、御指導を仰ぐことと
なった。

先生の描かれる水墨画はまるで
魔法のように生まれ、いつも魅了
させられる。線の美しさ、運筆の

速度、墨の濃淡、単純にして躍動
的、墨色にして色を感じ、生命力
あふれる表現。時には「私でも描
けそうだ」と錯覚をおこすことも
あるが、さにあらず、描けば描く
ほど迷路にはまり、もがいている
自分がいる。つ

くづくと水墨画
の奥深さを感じ
る昨今である。

水墨画は正に
日本の心、淡白
な中に味わいが
あり、四季の美
しさを改めて感
じている。
まだまだ未熟



者が、今までの歩みの一端を披露
することにした。できれば水墨画
を生涯の友として続けたいと願っ
ている。
(平成二十九年十月十八日 記)

会員の声

念願が適って



吉原 宏文
(昭四二卒)

私は、今年(二〇一七)五月十八日(木)、声を上げてくれた元愛媛大学仏教青年会の会友・西内正起君(高知市出身・文学部文乙卒)と山本徹君(松山市出身・農学部卒)の二人と、私を加えて三人で、升田栄先生の御供養として松前町の義農公園に行くことを決意した。色々との葛藤もあり、大学卒業後五十年の歳月が流れたが、升田先生に格別の御教導を頂いた選ばれし三人によって実現した。まさに、「三人寄れば文殊の智慧」である。

当日、私は広島から船で、西内君は高知からバスで、正午の集合を約束し、松山市駅前の高島屋デパートのロビーに着いた。地階の

生花店で花を買い、山本君の自家用車で義農公園に向かった。幸運にも快晴に恵まれ、浄土真宗の僧侶である私が記念碑に生花をお供えし、阿弥陀経を誦した。儀式を無事終了し、義農作兵衛翁と升田栄先生にお別れを告げ、夕方には松山市内に戻って、三人で道後の一遍上人の誕生寺である宝厳寺(火災で新築)にお参りした後、夜の宴となった。心満された一日であった。

升田栄先生は、明治三十一年松前町浜に生まれ、志を抱いて東京に出て、幣原坦(たんとも読む)博士に私淑し、苦学力行、東洋大学仏教学科に学ぶ。後、幣原博士と共に台北帝国大学設立に尽力

し、同大学の図書館長、亦同教授となる。しかし、敗戦で運命の大転換を余儀なくされ、帰国後は、専ら生まれ故郷松前町の義農作兵衛翁の遺徳を顕彰する多くの短歌を詠まれた。松前の郷はもともと貧しい村であったが、享保十七年(二七三二)の大飢饉の際、翌年播種する麦を残すため蓄えの麦種を枕に作兵衛翁は餓死した。もし、麦種を食べていたら生命を繋ぐことができたかもしれないのに、「農は永遠、我が命は一瞬」の信念のもとに餓死されたのである。彼の自己犠牲の精神は後々地域住民の鑽仰追慕の的となり、義農神社を建立し、神霊として祀られているのである。升田先生は「み墓守り幾年経りぬ老い松の根に屈まへば袖に露する」と詠まれ、義農公園内の記念碑に刻まれているのである。

升田栄先生が私淑された幣原坦博士は、明治三年大阪府門真市の旧家である幣原家の長男として生まれる。(坦の次弟は、戦後、内閣総理大臣としてアメリカのマッカーサー司令長官と話し合い日本

の平和憲法の草案起草に尽力した幣原喜重郎である。)坦は東洋史学者(朝鮮史専攻)であり、戦前の植民地行政、植民地教育を推進した官僚、教育者としても知られている。明治二十六年東京帝国大学文化大学国史学科を卒業、東京高等師範学校教授、東京帝国大学教授等を歴任した後、大正二年には広島高等師範学校長となった。明治四十三年、欧米諸国に行き、教育制度の考察をした。この時期で西洋教育の認識を深め、後の台北帝国大学の設立に大きな影響を与えた。「台湾の学術の価値」という学術論文を発表。親友伊澤多喜男の誘いで台湾に行き、台北帝国大学の創設に努力し、昭和三年同大学初代総長に就任。彼の念願のひとつは、台北帝国大学は少なくとも三つの学部を所有し、総合型大学の条件を満たすことであった。太平洋戦争の勃発後の昭和十七年大東亜錬成院の初代院長になる。敗戦後の昭和二十一年枢密顧問官に就任。そして昭和二十八年大阪で病没。

さて、升田栄先生は仏教哲学者

ながら、カント哲学にも造詣が深く、私も大きな影響を受けた。有名なカントの三批判書のうち、「実践理性批判」の中に次のような文章がある。すなわち、「道徳的な人格の完成者(神霊)への尊敬は定言的命法(なすべし)」という義務の概念に依拠している。義務とは道徳法則に従い、心の傾き(傾向性)に基づく全ての意志の規定根拠を排除し、客観的に実践的な行為をすることである。道徳法則は自愛を毀損し、自己を破壊し、人を謙虚にする。道徳法則は純粹実践理性の客体であり、究極目的でもある。そして最高善の概念を通じて宗教へと到達する。あらゆる義務を制裁としてではなく、神の命令として認識することである。ある他者の恣意的で、それ自体が偶然的な指示として認識するのではなく、自らの自由な意志をそれ自体の本質的な法則として認識する。道徳法則は、世界において可能な最高善を私たちの全てのふるまいの究極の対象とせよと命ずる。最高善が実現されることが希望であり、私たちの意志を神聖

で慈悲深い世界創造者の意志に一致させることである。道徳法則は、幸福を求める私たちの無制限な要求を様々な条件のもとで厳しく制限する。人間は、人格的な存在者として感性界（現象界）の一部であるとともに、聖なる法則である道徳法則に従う者として叡智界に属する者でもある。人間はこのように、叡智界と感性界との二つの世界に属する者である。尊敬の念と聖なる法則を結びつけるのが義務の意識である。尊敬は人格に向けられるが、道徳法則そのものは、尊敬の対象となるのではなく、聖なるものという性格を帯びる。この尊敬と聖なる法則には内的な結びつきがある。その人格が聖なる法則に従っているからこそ、尊敬の念が他者の心のうちに生まれるのである。」

最後に、戦後の国立二期校として出発した愛媛大学にはまだ欠けていた、戦前の帝国大学のスケールの大きな学風や蛮からな学生氣質を升田先生から聞かされ追体験させてもらったことは、青春時代の貴重な心の財産になった。そし

て何よりも道徳法則の本質と重要性を教示していただいた。特に、仏門に入り浄土真宗の僧侶になった私は、時間の経過とともに墮落していく教団制度を厳しく批判して、仏道の原点に立ち返ることの大切さを常々指摘されてきた。近年、子どものいじめや自殺のニュースがあつたを絶たないが、自己犠牲をものともしない真の教育者の出現を願うばかりである。

参考文献

- フリー百科事典「ウィキペディア (Wikipedia)」
- 義農作兵衛翁顕彰碑文
- 実践理性批判 (カント)

中山元訳 光文社

(平成二十九年七月二十二日(土))

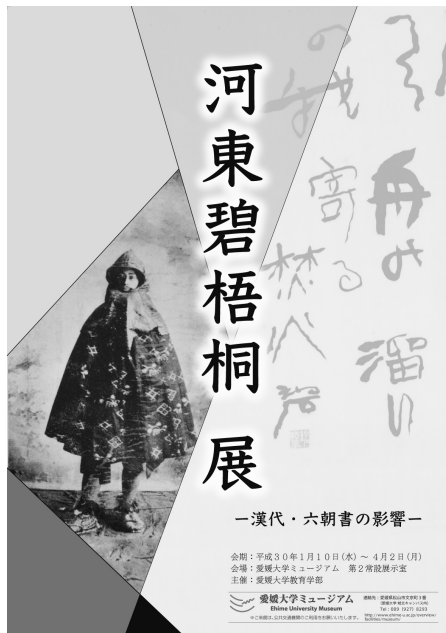


愛媛大学ミュージアムから

既にお越しいただいた方もあろうかと思いますが、愛媛大学ミュージアムは、二〇〇九年に愛媛大学創立六〇周年を記念して設置され、本学が蓄積してきた様々な資料や研究成果を一般の方々、特に若い世代にわかりやすく伝えることを目的に展示を行っています。

常設展示は、「進化する宇宙と地球」、「愛媛の歴史と文化」、「生命の多様性」、「人間の営み」の四ゾーン十コーナーからなり、企画展示スペース・多目的ルームでは、夏の「昆虫展」を始めとした、多彩な企画を随時開催しています。

教育学部の教員・学生による企画も少なくありません。二〇一七年度には、四月十二日～七月



三十一日の間、第二常設展示にて、愛媛の著名な能書家三輪田米山の作品を展示した「米山 多様な美の形」を開催するとともに、十一月二十四日～十二月十日には、美術教育講座（造形芸術コース・美術教育専修）の学生・卒業生・教員の有志による、企画展「状況二〇一七（美術作品展）」も開催しました。そして、二〇一八年には、一月十日～四月二日の期間、第二常設展示において、「河東碧梧桐 展―漢代・六朝書の影響―」展を開催しているところで

お近くへお越しの際は、是非ミュージアムにお立ち寄りいただきましたら幸いです。

(愛媛大学ミュージアム)

教育現場等から同窓会へ 支援要請依頼について

教育現場等で、同窓会へ支援のご要望がありましたら、左記のような内容で、同窓会へご連絡下さい。

1. 支援要請のねらい
 2. どのような事を
 3. 何時頃
 4. 何処で
 5. 誰が、どのような組織が
 6. どのような方法で実施する
- その為、同窓会からの支援を要請したい。

要請連絡は、左記の所にメールして頂くか、FAX又はお手紙をお送り下さい。

教育学部同窓会 インターネット 開設しています！

dosokai @ ed.ehime-u.ac.jp

メールアドレスは上記

お問い合わせ、会報への寄稿、住所、勤務先変更などの諸連絡にご利用ください。お待ちしております。

戦後二十年代の 松山市内雑感

あれこれ



小野植元幸
(昭二九卒)

昭和二十二年学制改革により、尋常高等一年より、新制中学二年

生。青年師範、男子師範、女子師範（松山西署近く）が統合し教育学部となった。樽味町には松山農大。持田町には文理学部。新居浜に「工専」といわれる学校があり、入学した昭和二十七年当時だった。

昭和二十年三月五日アメリカのB29が、吉田浜海軍航空港に爆弾投下。死者七十六人、行方不明三人。軽傷者百六十九人。旧松山市内七月二十六日夜爆撃。死者二百五十一人、行方不明八人、焼け残った建物は、県庁、日本銀行松山支店、地方裁判所は、壁を黒く塗っていた。勝山通りの右手、持田町あたりは家が残っていた。不思議なことに歩兵二十二連隊（現在城山公園）はあまり被害は

受けなかった。

復興の手はじめとして昭和二十三年松山博覧会があり、三月遠足で見学。第一会場は道後東ケランド。

当時金の靴、百万円といわれた品が印象に残っている。第二会場は、現教育学部。縦横約二メートルの大型テレビを展示。映像は、白黒、電波が乱れ、雨降りように映り驚く。アメリカでは、テレビが普及していたという。第三会場小栗町ラジオ電波塔近くにあり、付近は田園風景の中にあった。第八回国民大会開催のため急速に復興。

昭和二十八年国体のため国旗が軒並に立て旗の波。大街道、湊町はテントのアーケード。新栄座跡に三越がで隣に緑星堂書店があった。その前に「ロンドン屋」

食堂があり大繁盛。市内には、タイガー劇場、オリオン座、銀映等十一映画館があり大盛況。パチンコ屋、スマートボール店、衣料店が多かった。パチンコ屋の景品は、菓子、煙草等。

街頭では、スナップを撮る写真屋、皮靴の底をはりかえる「ハンバリ屋」があった。

戦時中負傷した傷痍軍人が、白衣に戦斗帽、松葉杖、胸に赤十字箱を持ち、助けを求めた。

石手川を越えると、農家が点々とあり田園地帯であった。護国神社付近は、水田、空き地があり、赤十字病院、附属小、中学校、教育学部ぐらいたった。教育学部は、二階建てで、廊下は板ばり。当時は、物不足。男女共に高校時の服装が多く下駄で歩くと授業中音が出てやかましかった。

グラウンドは、サッカー場、バレーボールコート、テニスコート以外は芝生だった。体育館がなく、百人以上の授業の時は、持田町の文理学部へ移動した。四国四県合同の第八回国民体育大会、市内、市外に広告塔が立っていた。

愛媛が主会場のため、兵舎跡の堀之内に体育館（屋根が貝殻に似ているので別名貝殻体育館）

陸上競技場兼競輪場、ラグビー場、国体事務局等ができた。私は、補助役員でボランティアをしてよい思い出になった。陸上競技場では、両陛下が来県されて開会式があり、約二万人の観衆。松山駅、松山市駅は新築。市内は、電車、バス終始満員、商店街は、人人、舗装道路になり、道幅が広くなり、街路樹植栽。天皇皇后両陛下が、伊予市五色浜に行かれるので一新した。国体は、天皇杯七位。それ以来破られていない。

二回目国体のみられ長生きしたかいがあったと実感している今日この頃である。

喜多郡内子町五百木
一五四



表紙作品について

○作品タイトル

改組新第四回日展(二〇一七)

「東京待宵」

(124×162 cm)



作者
渡邊 裕公
(本名・博明)
(昭四九卒)

今年度・日展審査員に就任。

高層ビルのレストランから見た夜景の素晴らしさを再現しようとしてこの地は思い出の場所。遠距離恋愛中の今、年に何度か出逢う場所。

「待宵」とは月の隠語で十五夜の月を待つ宵の意で、陰暦八月十四日の夜。

キャンパスにカラーボールペンでハッチング(線重ね)と点描による描写。

- ・日展 審査員
- ・光風会 評議員

- 二〇一 日展特選
- 二〇二 光風会記念賞
- (会員最高賞)

- 二〇三 日展特選
- 二〇四 光風会記念特別賞
- (評議員最高賞)

- 二〇六 光風会・文部科学大臣賞

伊予郡松前町筒井
一三七五―八

青春の歌声溢れる

「さんし会」を開きました

河合 淳
(昭三四卒)



「さんし会」と聞くと、何か、上方落語でも有名で、TVの長寿番組でもある「新婚さんいらっしゃい」の名物司会者でもある「桂三枝」師匠の後援会かと勘違いされそうですがそうではありません。

「さんし会」は、愛媛大学教育学部を昭和三十四年に卒業した、同期の有志が現職時から集まって組織された会です。

この会の発足に当たっては、人間味豊で、誰もが何時も頼りにしていて、自然とおんぶにだっこで、

渡部修治さんに、上手にまとめてもらった会です。そして、修治さんをサポートする面々も多士済々の方々ばかりで、東予には白石功さん、安永幾雄さん、中予には玉井俊幸さん、竹田敏行さん、南予では土居泰正さん、草原勲さんと素晴らしいメンバーがサポートしています。勿論県外も確りとした連絡網も完備しています。定年退職後は、毎年一回は集まり、ワイワイガヤガヤと楽しく旧交を温めています。今回平成二十九年の会は、十月二十九日(土)に、松山市の「にぎたつ会館」において、十六時に集合写真撮影、十六時三十分竹田敏行さんの乾杯の音頭で威勢のいい懇親会がスタートしました。昨年は傘寿を祝う会でしたので、今年の会は齢八十歳を全員クリアしての会となりました。参加者全員老いて益々盛んな面々ばかり、何時ものように、テーブルに並んでいるご馳走にはあまり口を動かさないで、動いているのは、お喋りの方の口と言ったところでは、それというの、

皆長年の教職経験者ばかり、その豊富な教職経験から身についている豊かな知識、技能を定年後も地域社会や地域教育関係の方面から求められ、今なおそれに応えてバリバリと活躍している方々ばかりです。だから話も勢いがあり、現状報告、情報交換と会話が入り乱れます。しかし、寄る年波でしょうが、健康管理につい



て、病気の報告とその対処法、病院情報、葉情報等々の会話も増えてきたのも事実です。そんな中、突然でした。「おい皆、明るく元気に歌おや！」の声が沸き起こってきました。そこには、八幡浜管内の面々が、素晴らしいアコーディオンを抱えた竹本裕さんを囲むようにして、皆に呼びかけているではありませんか。そして、歌う歌詞をプリントした用紙を配っているではありませんか。さすが教育学部出身、元先生！見事！。歌は「青い山脈」「啼くな小鳩よ」「みかんの花咲く丘」「昔の名前で出ています」の四曲。早速、竹本さんの見事な演奏をバックに、皆笑顔で、アルコールの入った頬を紅潮させながら、思いが青春時代に帰ったり、壮年時代に帰ったり、熟年時代に帰ったりと、その元気で明るい青春の歌声は「にぎたつ会館」に響き渡りました。



今回の、竹本さんを始め、八幡浜管内提供のサプライズは見事なものでした。一気に場がぐんと盛り上がりました。会の最後の呼びかけに、渡部修治さんから「来年の会は、八月に開催される『愛大教育学部同窓会懇親会』にこの勢いで皆参加しよう」との呼びかけがあり、楽しい会が終了しました。「さんし会」万歳！

棟梁・坂本又八郎の情熱と工夫

西洋建築の技術をどこで知りえたのか？

伊佐庭町長から道後の百年後を託され、神の湯本館の設計施工を任された坂本又八郎とはどんな人物なのか？

なぜ西洋の技術を導入しようとしたのか？

残された資料から可能性を考えてみた。

松山城の城大工・坂本家

坂本又八郎は天保八年（一八三七）生まれ。又八郎という名は代々坂本家に受け継がれたものらしい。初代又八郎は、伊勢桑名城主の松平定行が松山藩主に任ぜられるに伴って、松山に移り住んだ城大工だった。

松山城は天明四年（一七八四）の落雷で本丸の大半が焼失し、幕末の嘉永五年（一八五二）、古式

に忠実に再現された。先代にあたる九代目又八郎は、この再建に腕を振るった棟梁だった。

この時十代目は十五歳。経験は浅くとも、知識や技術をスポンジのように吸収する年齢に達していた。次期又八郎を継ぐ者として、城の再建工事に関わったのは間違いないだろう。

西洋建築技術との接点

神の湯棟の屋根には、トラスという西洋の小屋組が使われている。そして舶来の色板ガラスも使われている。

いったい又八郎はこのような西洋の建築技術をどこで知ったのだろうか？

松山城の山麓、現在、松山若草合同庁舎（若草町）の建つあたり

に、明治二十三年から昭和初期まで愛媛県師範学校があった。

師範学校は瀟洒な白亜の洋館で、工事費四万一千円とうあまりの高額に、秦の始皇帝が築いた宮殿をもじって「伊予の阿房宮」と呼ばれていた。

設計と施工は小宮山弥太郎。明治二十二年に愛媛県知事として赴任した藤村紫朗が前任地の山梨県から招いた棟梁だ。

藤村は山梨県令（知事）時代に、多くの擬洋風建築を建てさせた。その建築群は「藤村式建築」と呼ばれ、小宮山はその多くを手掛け、知事から信頼を得ていた。

弥太郎が山梨で建てた学校には、ほぼ全ての屋根に塔屋があり、時刻を知らせる和太鼓が吊られている。また、山梨県庁はギヤマンの殿堂との異名をとるほど、舶来

の板ガラスがふんだんに使われていた。もちろん屋根はトラスが使われている。

藤村はわずか一年で愛媛を去るが、弥太郎はおよそ五年滞在し、師範学校の他に官庁舎の建設にも携わったと伝えられる（太平洋戦争で全て焼失し現存せず）。

この間又八郎と弥太郎が接触したという記録はないが、道後温泉本館建築の四年まえにできた愛媛県師範学校のインパクトは、又八郎の職人としての知識欲を刺激するには充分だっただろう。

又八郎の中に、西洋の技術を取り入れる柔軟性と、日本の大工の腕をもつてして、西洋の技術を習得できないわけがないという自負も垣間見える。無用の長物と言われた振鷲閣建設を押し通したのも、又八郎にとって塔屋は西洋建築Ⅱ文明開化の象徴だった。

—*—*—*—

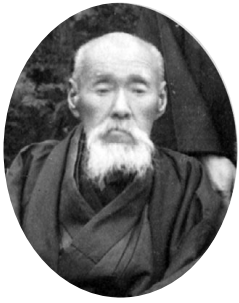
株式会社エス・ピー・シー発行
『四国旅マガジンGATA(ガジャ)』
平成二十九年九月二十五日発行
「進化する湯のまち 道後温泉」
より転載

旧津金学校・明治校舎

山梨県北杜市の旧津金学校には、小宮山弥太郎が設計し明治8年（1875）に竣工した藤村式建築の校舎が残る。津金小学校は昭和60年に閉校となり、明治校舎は老朽化のため昭和63年に解体し、平成2年に修復された。現在は郷土資料館として使われている。山梨県指定有形文化財。

（写真提供／津金学校）





こみやま たろう
小宮山弥太郎

文政11年(1828)山梨生まれ。社寺建築と彫刻の修業をし、明治維新後は、独学で洋風建築の設計や技術を習得した。藤村式建築と呼ばれる官庁舎や学校を多数設計施工している。愛媛から故郷に戻ったあとは、大工組合を結成、後進の育成に力を入れるかたわら、官営建物、寺社などの設計にも携わった。
(写真提供/小宮山茂久さん)



ふじむら しろう
藤村 紫朗

弘化2年(1845)肥後(熊本県)生まれ。明治6年から山梨県令(知事)を勤める。山梨では当時の輸出の花形だった蚕糸業に力を注ぎ、教育では「新しい学校は新しい校舎から」をモットーに、小学校校舎の建築を奨励。校舎は文明開化を印象付ける洋風式で、藤村式建築と呼ばれた。
(写真提供/甲府市教育委員会)



道後温泉神の湯本館棟の大屋根を支える西洋式の小屋組(トラス)。部材を三角形に組むことで力が分散されるので、大きな建造物を作ることができる。
※見学不可



阿房宮と呼ばれた、在りし日の愛媛県師範学校。現在は石碑のみが建っている。
(写真提供/愛媛大学教育学部同窓会)



現在、北堀端にある碑とレリーフ

甲府にある
藤村記念館(旧睦沢学校校舎)

明治8年に巨摩郡睦沢村(現甲斐市)に建てられた藤村式建築の小学校校舎。宝形屋根の塔屋は太鼓櫓だ。設計施工は松木輝殿。昭和41年甲府市へ移築の際に藤村記念館と命名され、その後は教育資料館として使われている。平成22年、甲府駅北口に移築復元された。国指定需要文化財。

(写真提供/甲府市教育委員会)



学部トピックス

サッカー部活動

私たちは愛媛大学男子サッカー部は、部員四十五人で活動しています。今年もOB・関係者の方々のご協力、ご支援により様々な大会に出場できたことを部員一同、大変感謝しています。

さて、今シーズンの成績を順を追って報告させていただきます。

【第九十七回天皇杯全日本サッカー選手権大会 愛媛県大会】

二月に行われた天皇杯では、準々決勝敗退でした。一回戦は東レ愛媛に7-0、二回戦は帝人蹴友会に6-0で勝利しましたが、続く準々決勝では、新商クラブに対し、PK戦の末敗れました。目標であった決勝戦進出とはなりませんでした。



【平成二十九年四国大学サッカーリーグ】

昨年の一部、二部入れ替え戦で勝利し、今年から一部に復帰しました。十節あり、二勝一分七敗で五位に終わりました。不本意な結果ではありましたが、一部残留を決めることができました。来シーズンも一部で戦える喜びを感じながら、上位を目指します。



【総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント四国地区予選会】

昨年は準決勝進出ができ、今年も全国大会出場枠が二つというところもあり、それを超える結果を目指して挑んだ大会でしたが、結果は聖カタリナ大学に0-2で敗れ、一回戦敗退となりました。



【二〇一七インディペンデンスリーグ四国】

このリーグは、出場機会に恵まれない選手にも公式戦の出場機会を提供し選手の自立と大学サッカーの底辺拡大を目指した大会であり、四国では今年度が初開催でした。七節あり、三勝一分三敗の四位で、決勝トーナメント進出を果たしました。決勝トーナメントでは、準決勝高知大学Aに対し、2-1で勝利し、決勝では高知大学Bに対し、1-1PK戦の末、優勝し、全国大会出場を決めました。さらに、愛媛大学から藤井瑞樹が最優秀選手賞を受賞しました。

【二〇一七インディペンデンスリーグ全国大会】

各地区予選を突破した十二大学が三グループに分けられ、総当たりのリーグ戦が行われました。初戦は、九州代表の福岡大学A2に対し0-4、二試合目は東海地区代表の愛知学院大学に対し、0-3、三試合目は関東代表の中央大学に対し、0-4で敗戦し、グループリーグ突破とはなりません。



んでした。全国大会のレベルの高さを痛感し、全敗という結果でしたが、貴重な経験になりました。今年も、インディペンデンスリーグ四国予選を勝ち抜き、愛媛大学男子サッカー部としては五年ぶりの全国大会出場となりました。来年は他の大会でも全国大会出場を目標に、チーム一丸となつて精進して参ります。



会報の送料納付 について

平成二十九年七月号でもお知らせしましたように、会報の個人宛発送は、送料を各自で負担していただくことになっております。

出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

記

①一年間五〇〇円で、二年間分ずつ収めるようになっていきます。

②二年ごとの更新は、煩さなので、何年間かを、まとめられる方もあります。

納付期限 毎年三月三十日までとし、二年毎に更新する。

送金方法 郵便為替・現金書留・郵便振替で

振替口座番号

〇一六四〇一七一二七五四
送り先 ☎七九〇一八五七七
松山市文京町三

愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもって、かえさせていただきます。

寄贈図書



「余韻」

突っ走るのもいいけれど

寄贈者・著者

玉井 俊幸

A5版 百九十二頁

印刷・製本 セキ株式会社

会報送料・寄付者名

平成29年6月～12月

大野 紀子
吉原 宏文
三浦 哲生
清水 恵子
松本 利夫
郷田 幸枝
鳥津 教恵
昭三三卒同期会

敬弔

(物故会員)

死亡年月日	(氏名)
29・4・4	泉 正 顕
29・4・4	日下部 正 盛
29・4・8	宮本 季 武
29・4・8	山崎 義 文
29・4・13	山内 文 雄
29・4・14	山口 正 泰
29・4・25	山岡 芳 朗
29・5・5	長岡 芳 朗
29・5・5	森 慎 一郎
29・5・6	江戸 昌 宏
29・5・8	清水 栄 三
29・5・10	森岡 俊 一
29・5・16	赤松 本 亨
29・5・21	森 康 子
29・5・22	北尾 洪 生
29・5・27	山下 和 美
29・5・28	山田 愛 大
29・6・4	町田 雄 厚
29・6・7	廣川 哲 男
29・6・14	武智 繁 雄
29・6・16	北岡 杉 雄
29・6・18	富田 愛 鶴
29・7・3	門岡 武 雄
29・7・8	越智 孝 京
29・7・10	井上 俊 一
29・7・10	井上 本 雄
29・7・10	富田 本 薫
29・7・19	宮崎 幸 子
29・7・19	尾上 孝 大
29・7・27	黒田 又 夫
29・8・4	垣 鏑 誠 一
29・8・4	坂上 愛 大
29・8・6	安藤 愛 大
29・8・8	渡邊 英 次
29・8・9	谷本 敏 秋
29・8・17	十亀 哲 大
29・8・17	日野 良 大
29・9・7	大森 敏 子
29・9・13	三好 康 昭
29・9・16	酒井 芳 郎
29・9・17	田中 晋 美
29・9・19	成 本 歳 信
29・9・21	高橋 保 則
29・9・25	酒井 正 康
29・9・27	玉井 思 大
29・10・6	合田 弘
29・10・6	定岡 壽美香
29・10・10	宮領 理 一郎
29・10・10	大政 和 子
29・10・17	小池 フサエ
29・10・27	小池 フサエ
29・11・5	神野 正 憲
29・11・9	白方 潔
29・11・17	三木 智 海
29・11・18	高野 忠 夫
29・11・20	清家 博
29・11・26	浪口 節 美
29・12・2	小林 瑠璃子
29・12・6	酒井 芳 郎

第8回愛媛大学ホームカミングデイを開催しました

【平成29年11月11日】

平成29年11月11日(土)、城北キャンパスの木々が紅葉する中、卒業生や在学生、元教職員の皆様方をお迎えし、「第8回愛媛大学ホームカミングデイ」を開催しました。本年は校友会海外支部のマレーシア、ベトナム、インドネシア、中国、ネパール、バングラデシュ等の帰国留学生の方々にも多数ご参加戴き、「グローバルホームカミングデイ」として、国際色豊かにかつ盛大に開催しました。

南加記念ホールで開催された式典の第1部では、超満員の中、大橋学長からの挨拶と愛媛大学の近況について報告があり、続いて、グローバルホームカミングデイに因んで、安川国際連携推進機構長から、本学の国際連携の取り組みについて紹介がありました。

続いて、校友会会長の三浦工業株式会社高橋祐二会長から、「海外で活躍する卒業生、愛媛大学への期待」と題して、現在、三浦工業株式会社で活躍する本学卒業生の紹介と愛媛大学へ期待すること及び同社が必要とする人材等について、特別講演を戴きました。

第2部においては、バングラデシュのNur Ahamed Khondakerさん、マレーシアのIswadi Jauhariさん、ベトナムのLe Thi Haileさんの3名の帰国留学生の方々から、「学生時代と今のわたし」と題して、時にユーモアを交ぜながら巧みな日本語でのスピーチを戴きました。

最後に、エルニ・ジョハンさんをはじめ在日インドネシア留学生協会愛媛大学の皆様に、インドネシアの民族衣装を纏いジャワ島の伝統舞踊を披露して戴きました。

式典後の大会館で開催された懇親会では、本学を卒業後、県内企業に就職し活躍されている元留学生のYousif Elsamaniさんと劉芳さんからのスピーチやダンス部、馬術部、男子サッカー部の代表者による活動報告等がありました。

また、本年も愛大オリジナルグッズや附属農場の生産品が当たるジャンケン大会が行われ、校友会の野村副会長、野倉退職教員の会会長、清水首都圏支部長、岡本近畿支部副支部長、岡田中国支部長（予定）との対戦に大いに盛り上がりました。

ご参加いただきました皆様方には誠にありがとうございました。来年は11月10日(土)に「第9回ホームカミングデイ」の開催を予定していますので、皆様、是非、愛媛大学にお帰りい！お待ちしております。



大橋裕一 愛媛大学長挨拶



高橋祐二 校友会会長



学歌斉唱



インドネシア伝統舞踊

